

どのようなはたらきをするかについての心理学的分析をするアリストテレス流の倫理学が、どのように変貌し、近代の規範倫理学を生じたかを明らかにしようとする試行的研究である。著者は「意志の自由」という、アリストテレスにはなかった要素が関わっていたこと、また原罪によって悪い状態にある人間が良くなる可能性が説明されなければならないこと、等がこの変貌を引き起こした要因になっていることはたしかなことと見ている。

とは言え、評者から見て記述の混乱の原因は、まだ問題が十分に了解されていないことにある。それはトマスからスコトゥスまでの推移を見定めれば問題が見えてくるというものでもないらしい。もちろん評者自身もこのことを理解したのはこの作品を読んでみてのことであるから、この点は著者に感謝するほかないが、実際にはスコトゥスの倫理学が「規範倫理」であると解釈するには、まだ研究が不足しているように見える。

結論を言わせてもらえば、この種の研究を軌道に乗せるためにも、そもそも何が倫理学に規範性を生ずるのか、という点について、理論的考察が切にまたれる。

---

Ralph McInerny:  
*Aquinas and Analogy*

Washington, D. C., The Catholic University of America Press,  
1996, pp. x+169.

井 沢 清

著者は、序文にあるとおり、*The Logic of Analogy* (1961) の出版以降も、続行された研究の成果を *Studies in Analogy* (1968) にまとめた。両著は長く絶版となっていたために、再版にあたり、書き改められたものが本書である。以下、著者の論述を要約していく。

トマスのアナロギア論はカエタヌスの小著 *De nominum analogia* (1498) におけるアナロギア解釈の枠組みのもとに理解されてきた。だが、カエタヌスはその解釈を誤った。カエタヌスの誤謬を指摘し、アリストテレスにおけるアナロギアの役割、そのトマスにおける影響の程度を検討し、トマスにおける正確なアナロギア論を率直

に示すこと、それが本書の意図である。

第一部、序論1. カエタヌスがそもそもアナログ的な名称を三種、あるいは四種に区分したことが根本的な誤謬であった。その三区分別はトマスの『命題集注解』(I, 19, 5, 2, ad 1)に基づく。それによれば、何かアナログに従って言われるのに三通りある。[1] 概念のみに即し、存在には即しない場合。例。健康の概念は動物、尿、食事療法で相違するが、健康の存在は動物にのみある。[2] 存在に即し、概念には即しない場合。例。「物体」という名称はすべての物体に同名同義的に述語される。しかし、可滅的なものと非可滅的なものとは、その存在は同じ概念には属しない。[3] 存在と概念に即する場合。例。「有」が実体と付帯性とに関して言われる場合、共通の概念からも、存在上も、双方は同等とはされない。

カエタヌスはこの箇所がアナログ的な名称を三種に区分するもの(順に、帰属、不等性、比例)と見なす。しかし、[2]の例で明かにされたことは、存在に即した不等性が同名同義語には無関係である、ということである。さもなければ、類はすべてその種差によってアナログ的であるということになってしまう。同様に、存在に即した不等性はアナログ的な名称とは無関係であり、そうである以上[1]と[3]の区分、すなわち帰属と比例のアナログの区分はトマスにはない、ということになる。

『命題集注解』を読み違えたために、カエタヌスはトマスの『神学大全』(I, 16, 6)を注解する際にも自らのアナログ解釈を貫こうとする。アナログに従って言われるもの(例。「健康なもの」)は「本来の意味」からはただ一つのもの(例。動物)のうちのみ見出され、他のもの(例。尿、医薬)はその一つのものによって命名される、というトマスの規定は帰属のアナログには妥当するが、真のアナログである比例のアナログには妥当しない、とカエタヌスは述べる。「本来の意味」は、真のアナログにおいては「有」の場合のように、アナログの各項に見出されなければならない、と見なすからである。

序論2. カエタヌスが規範とするアリストテレス説を検討する。トマスのアナログ的な名称に関する説は、アリストテレスにおいて対応するものがある。例。「ある」と言われる場合。同様の事例として、「健康な」が挙げられる(*Metaph.* IV, 2, 1003a33-b16)。アリストテレスの場合、アナログの第一の意味は実在的な関係を含意する。それは、比の類似、すなわち、比例である。但し、アリストテレスにおいてもトマスにおいても、比例はアナログ的な命名と同じではない。アナログ的な

命名に関する限り、それは論理的な次元（「概念に即して」）での議論であり、実在の次元（「存在に即して」）と混同してはならない。カエタヌスはその両次元を融合して、本当のアナロギアを作り上げたかったのかもしれないが、それはアリストテレスも、トマスも斥けたであろう。

第二部. 関連テキストに基づきトマスのアナロギア論を系統的に説明していく。

3. 名詞 (nomen) は質を伴って実体を表示する (ST, I, 13, 1). 名称が主に表示する質 (形相) は抽象名詞による単純形相か、具体名詞による複合体の形相かのどちらかである。この文脈中に「表示されるもの」(res significata) と「表示様態」(modus significandi) の区別が取り上げられる。(具体名詞の表示様態は自存的であるが複合的であり、抽象名詞の表示様態は単純であるが自存的ではない。いずれの名詞も神を完全には表示しない。)

4. アナロギア的な名称には複数の概念があり、その各々において表示されるものは同じであるが、表示様態 (例. の徴、の原因、の基体) が異なる。第一の概念である本来の意味・固有概念 (ratio propria) は「表示されるもの」を表示する第一の、統制的 (他の概念を限定する) な様態である。アナロギア的な名称が持つ複数の概念の一部は同じで、一部は異なると言われるのは、表示されるものは同じだが、表示様態が異なるということである。

5. トマスは大半のテキストにおいて、アナロギア的な名称の種類を「多くのものの一つのものに対する」比が認められる場合 (医薬と尿が第三者である動物の健康に対する) と、「一方のもう一方に対する」比が認められる場合 (医薬が動物の健康に対する) との二つとする (ST, 13, 5, c.).

しかし、アナロギアが比と比例に二分され、上記の二区分が比の中での下位区分となっているテキストがあり (De ver. 2, 11), そこには比例のアナロギアの入る余地がないように見える。だが、比例のアナロギアは「一方のもう一方に対する」比、つまり、比の比に対する比であるとみなすことができる。

トマスのこの区分の意図は、神と被造物とが関係づけられる第三者はない、ということを示すことであった。

6. トマスによるアナロギアの規定によれば、本来の意味・固有概念は一つのものうちのみに見出される。比例を真のアナロギアと見なすカエタヌスにとって、問題は、固有概念を保持しない場合、どうしてそのものは本来的・固有的に言われうるか、

である(言えないのであるが)、この問題こそがカエタヌスの解釈を歪めた謎であった。

トマスは神と被造物にアナログ的に共通の名称においては、「表示されるもの」は双方に見出されると言う。カエタヌスは名称の「表示されるもの」とその「本来の意味・固有概念」とを同一視しているのである(実在と概念との混同がある)。

トマスの場合、アナログには意味の拡張があり、表示様態の相違によって別の意味が形成されるが、転喩は名称の転用であるから、表示様態に相違はない。しかし、語が通常文脈から別の文脈へ移し変えられるという点から見れば、アナログは一種の転喩である。さらにアナログの表示様態には固有性の段差が認められる。転喩はその程度の最も低い段階と同等視される。アナログと転喩の相違は程度の差と言える。

7. 「アナログ」という語はアナログ的である。すなわち、数学における、「一方の他方に対する一定の量的関係」がその本来の意味である。これは一種の比であり、その意味は拡張されて、結果としての被造物が原因としての神に依存する実在的な関係、知性とその対象に認められる認識論上の関係にも適用された。これに対し、名称のアナログとは、共通に用いられる語が持っている第一の意味に対する二次的な意味の比である。このアナログは上記の領域を越えてその意味が拡張されている。

(8の冒頭より)「アナログ」がアナログ的であることを明かにすることによって、その語のいくつかの意味のうちただ一つだけが名称のアナログだということが理解される。従って、結果の原因に対するアナログ(例、被造物の神に対する実在的な依存関係)を、名称のアナログの一種と解釈しようとするなら、それは誤りである。

8. 関係項の一方を知ることで、アナログにより、もう一方を発見することが可能となる。量的な関係では、比例によって、配分における正しさの中間が、その関係を越えた領域では、様々な変化とその基体の比の類似から、実体の変化の基体である第一質料が発見される。

9. いわゆる「存在のアナログ」(analogia entis)はトマスの説ではない。実在上の秩序ではなく、論理上の秩序を指示するために、トマスは「アナログ」という語を使用する。従って、それは『存在』(という語の)のアナログと言うことができる。

以上が著者の論述の要約である。

『真理論』によると、比は両項間にある限定された関係を生む。比例のアナロギアはそうした関係が神と被造物間に生じる可能性を唯一排除できるものであった (*De ver.* 2, 11, c.)。しかし、『神学大全』(I, 13) はこの点を全く顧慮せずに、神と被造物とに共通に言われる名称を比に従って論究しているように見える。著者はトマスにおけるアナロギア論の領域が論理的な次元にあることを指摘し、存在論の次元は領域外の問題として括弧に入れ、この難問に一つの解釈を与えた。その解釈の鍵となったのは表示様態に関する理論である。しかしその様態論は實在の次元を根拠として初めて論じられると見るべきであろう。その限り存在論を領域外の問題とすることは、問題の根拠の放置ということになる。テキスト間の異同が論争を生む問題領域であり、なお研究が必要だと思われる。

---

Simo Knuuttila:  
*Modalities in Medieval Philosophy*

Routledge, 1993, pp. xiii+236.

渋谷 克美

オッカムは *Summa Logicae* 第一部第二十四章において、次の議論を提出している。

「存在する (*esse exsistere*) ということがその主語について言い表わされている命題が真であるにもかかわらず、次の命題は神のちからによって偽となることありうる。それゆえ、『実体は量を持っている』、『すべての火は熱い』、『人間は笑う』……はいずれも非必然である。」(OPhI, p.80)

すなわちオッカムによれば、例えば「火は熱い」という命題は非必然 *contingens* である。なぜなら神は、火が熱いという性質を持たないようにすることができるのであるから、たとえ「火は存在する」という命題が真であり、火が存在するとしても、「火は熱い」という命題は偽となりうるからである。あるいは *Summa Logicae* 第一部第二十六章においても、オッカムは次のように議論している。

「従って、『人間は理性的動物である』は無条件に非必然である。……なぜなら、